オボコ沢

オボコというのは「あかん坊」のことで、オボコ沢は「子捨て場」をさす語であり、子供の死体が山をなしていたと伝えられている。場所については青少年ホーム横のくぼ地とも、東台のくぼ地ともいわれている。ケカジ(飢饉)のため間引した子供を捨てたところとも、不運に生まれた子供を捨てたのがはじまりとも、また、むかし古井戸があってアダコ(子守り娘)が水をツルベで汲み上げようとして、背中におぶった子供を井戸へ落してしまい、主人からしかられ同じ井戸に飛込み自殺し、その幽霊が出るため人が近づかなくなった古井戸の近くへ子供を捨てたのが、子捨て場になったのだとも伝えられている。

伝えられる話では、カラスが死骸に群をなしていたとか、野犬がそこに住みついて地獄絵図そのものだったとか、子供の首を犬がくわえてきたとか、子供の片腕が町の中に捨てられていたとか、捨てられた子供の群が世をうらんで泣き悲しむ狂ったような声を聞いたなどの話があり、「オボコ沢」と聞いただけで子供たちは泣き止んだものだと語り伝えられている。